

# 白井文化懇話会会則

## 第1章 名称及び事務所

第1条 本会は、白井文化懇話会（以下本会という）と称する。

第2条 本会は、事務所を会長宅に置く。

## 第2章 目的

第3条 本会は、白井地区を中心とした佐倉市の都市的機能と印旛沼を取り囲む豊かな自然、歴史的風土の特色を生かして、文化の活性化、育成、創造を提言し、あわせて会員相互の親睦を図ることを目的とする。

## 第3章 事業

第4条 本会は、前条の目的を達成するために、例会及び研究会、講演会、会誌の発行等必要な事業を行う。

## 第4章 会員、及び会費

第5条 本会は、原則として、第3条に掲げる目的に賛同する白井地区を中心とした佐倉市在住の個人及び所在する団体とする。又、同条に掲げる目的に賛同するその他の地域からの個人、団体の入会も認める。

2 本会への入会は、原則として、会員の推薦にもとづき、理事会の承認によって決定する。

3 本会会員は、2年間、第6条に定める会費を未払いの場合は、会員資格を喪失する。

第6条 本会の会費は左記の場合を除き月1,500円とする。

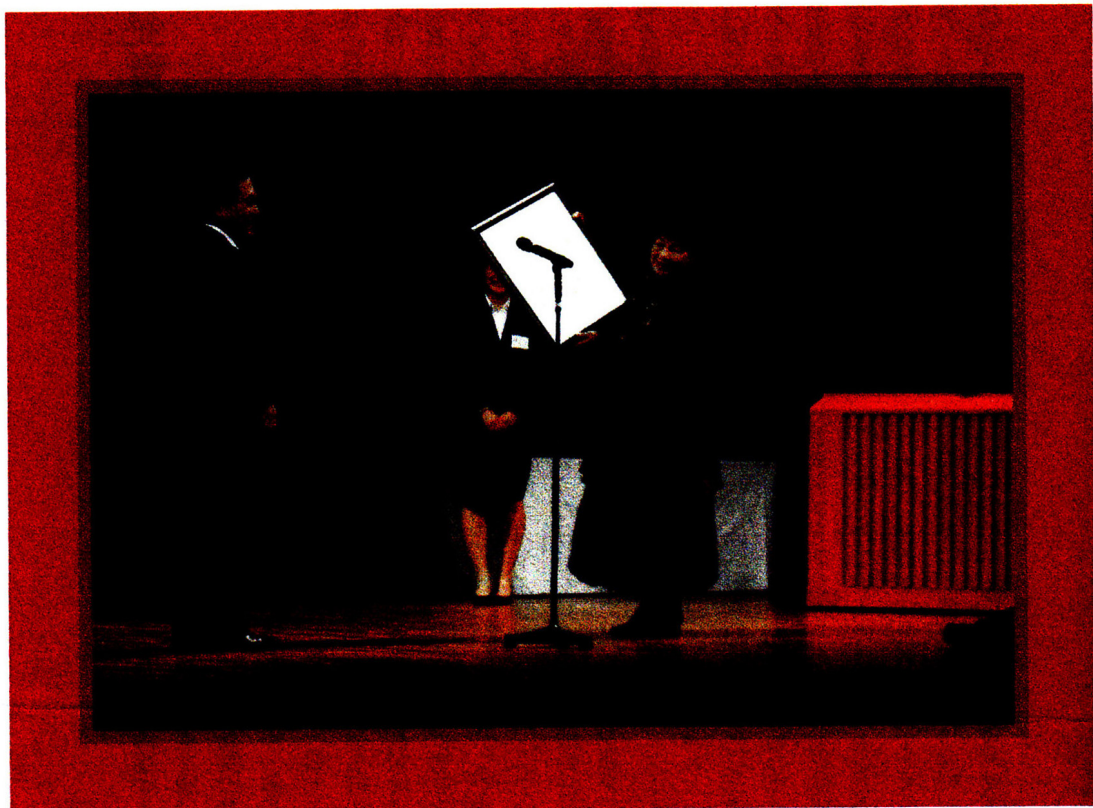
1 満90歳以上の者は終身名誉会員として無料

2 満80歳以上の者で、当会在会20年以上に該当する者及び満50歳未満の者は月1000円。

なお、右記1乃至2について年度の途中で当該年齢または在会年数に至った場合、その次年度から適用されるものとする。

白井文化懇話会会則

白井文化懇話会会則



島 利栄子さん（当会理事、女性の日記から学ぶ会代表）、水木十五堂賞を受賞  
（2017年1月29日 於 DMG MORI やまと城ホール）

# 「水木十五堂賞」受賞に感謝して

島 利栄子

水木十五堂は「大和の宝」と称された研究者、文人で、八千点にも及ぶ文化的史料（歴史、伝統文化、自然など）の収集、保存で知られる。地元・奈良県大和郡山市では、水木の遺勲を次代に伝えようと、平成二十四年に「水木十五堂賞」創設し、各分野において収集・保存・研究を通して社会に貢献した人を顕彰してきた。第一回

目は博物学者の荒保宏。第三回目には歌舞伎の市川猿之助が選ばれているが、この度、私島利栄子が「庶民の日記等記録の収集・保存の活動」に対して「第五回水木十五堂賞」を頂いた。女性として初めてということである。地味な活動を顕彰頂いたこと、感謝の気持ち一杯である。

昭和二十九年一月二十九日、受賞式当日。会場である「DMG MORI やまと城ホール」は四百人もの人々でいっぱいになった。「女性の日記から学ぶ会」会員の顔も見え心強い。大和郡山市上田清市長より賞を頂いた後、島利栄子受賞記念講演「個人の記録を社会の遺産に」、選考委員先生方との座談会、祝賀パーティーと続く。ホールに準備した「戦中戦後の日記いろいろ展」にも多くの人が集まってくれた。緊張しながらも、晴れがましい一日を十二分に楽し

ませて頂いた。

大和郡山市は奈良市に隣接する人口約九万の城下町である。小さな市がこうした全国的な賞を設け私の如き地味な分野にまで目配りして顕彰するなど、実に見識の高いことだと感心する。初代城主は筒井順慶。次いで秀吉の弟・秀長となり、江戸時代には柳沢吉保の子・吉里が入り、以来、一四七年間、柳沢家が城主だった。武士の副業で始まった金魚は現在も町のシンボルである。こうした長い歴史と伝統の中で水木十五堂が活躍し、この賞が生まれ、育まれているのだと、大和郡山の古い街並みを歩きながら納得した。

「日記と歩む過去・現在・未来」を合言葉に続けてきた「女性の日記から学ぶ会」も今年で二十一年目に入った。ブライバシーの詰まった日記を社会化する活動は日本でもオンリーワンとのことで、活動は無手勝で試行錯誤の連続だった。しかし多くの仲間を支えられ、活動を楽しく継続してこられたことを本当にありがたく思う。この度の受賞は二十年という一里塚を超えたことへの「褒美であり、今後への激励のエールだと受け止めている。

最後に水木十五堂と佐倉の関係を述べたい。八千点以上を誇る、水木コレクションの内六千点は何と「国立佐倉歴史民俗博物館」に保管されているのである。水木十五堂研究第一人者の久留島浩氏は、同館の現館長であり、水木十五堂賞選考委員でもある。佐倉との縁の深さに、感慨を禁じ得ない。

※詳細は本誌に日記風に書かせて頂いた。

## 《扉写真の解説続き》

# 「水木十五堂賞受賞」に感謝して

島 利栄子

\*はじめに

本誌とびらにも書かせて頂いたように、昭和二十九年一月二十九日、奈良県大和郡山市で「水木十五堂賞」を頂いた。白井文化懇話会でも多くの会員の皆さんから身に余るお褒めの言葉も頂いた。この度、中野英樹編集長から「受賞のことを日記風に書くように」と推薦を頂いたので、「日記風受賞の記」を書いてみたい。

\*平成二十八年七月二十五日 受賞の使者、八千代に来る

奈良県大和郡山市から「第五回水木賞受賞者に島さんが選ばれた。使者が何う」と電話を頂いた。ご使者の方二人が八千代中央駅に降り立つという。水木賞とはなに？大和郡山市とはどこ？恥ずかしながら慌ててネットで検索。概略は掴んだ。相当格式の高い賞のようだ。今日の面接でダメ出しということもあるのか？一張羅を着て、緊張し、駅で待つ。

ところが約束の時間になって待ち人現れず。待つこと三十分。もしや椿事でも？と不安に駆られて辺りを見回すと、何とキオスクの脇の見えにくいところにすらりとしたイケメン二人、おしゃべりに熱中している。白いワイシャツに紺のストラックス姿。手にはお菓子

の紙袋。この方たちか？前からずつとここで話しておられるのは知っていたが、私を一瞥すらせず、全くのそぶりなし。私もイケメンには弱いのだ。思い切つて近づいて「大和郡山の？」「え、はいはい。島さん？」となんと問の抜けた出会いの瞬間であった。彼ら曰く「余りにお若い方なので違うと思ひこんでしまつて」と。関西人はお世辞がうまいな。まず自宅へ案内する。秋の受賞発表、記者会見、半年後の受賞式次第まで、早くも詳細な日程が説明された。次は日記たちに対面してもらうため日記保管の現場八千代市立中央図書館へご案内する。「立派な図書館ですね」と褒めて頂く。二人は100冊近い日記保管箱から「笠原徳日記」の箱を選ぶ。笠原日記は350冊の多くが絵日記、絵巻物なので大喜びされる。早速何枚も写真撮る。これが後日ポスターとパンフレットとなって日本中に出回る事になった。お礼にお食事でもとお誘いするが「今日中に帰るので」と辞退。八千代中央駅でのお別れとなった。

\*八月三十一日 島利栄子プロフィール、写真送付

\*九月三十一日 受賞の言葉送付

\*十月三十日 受賞発表、受賞ポスター、チラシ出来



の追加は遠慮せずに」と電話が入る。「一枚だけ」とも言えず、ポスターは五枚も頼んでしまった。何んとも恥ずかしくポスターは押入れにしまい込んでしまった。大和郡山市さん、ごめんなさい。子供らに「臨終の際、棺桶の中に入れてほしい」と頼んでいる。ちなみにチラシは三百枚を追加で頂いた。方々へ配り歩かせてもらった。

### \*十一月三十日 記者会見

地元で記者会見が行われたらしい。奈良の新聞各紙が写真入りで報道してくれたらしく次々にコピーが送られてくる。

八千代市、朝日新聞千葉版、読売新聞千葉版からも電話を頂く。千葉県の記者クラブへも情報が入ったらしい。

驚いたことに奈良市に住む大学の先輩の関根栄さんからお祝いの電話が入った。関根さんは故郷が私と同じ筑北村坂北で両親とも周知の中。大変喜んでくれて何か応援したいと嬉しい申し出である。「祝い事なのだから、大学の同窓会や、村にもお知らせしたい」と

チラシが送られてきた。私の顔がどんと大きく載っていて驚く。ポスターなどあまりに大きくて見るのも怖いくらい。「ポスター、チラシ

進んで情報を流してください。そのおかげで村の広報からも電話が入る。広報「筑北」に紹介されたり、坂北駅の待合室や図書館の壁にあの大きなポスターが貼られたり、ちよつとした騒ぎになってしまった。

### \*平成二十九年一月 受賞式の準備

いよいよ年が明けた。受賞式には受賞講演と受賞展示を行わねばならない。頭はそのことではいい。相手は何も知らない方々だ。一時間で上手に受賞の意味を伝えなければならぬ。今回は映像がいいのでは……。しかし私の技術ではまいち。迷うがパワポは息子が手伝うといってくれる。シナリオの骨組みは私が書き、映像取り込みは息子。映写しては練習して推敲を重ねる。夫が時間を計り、批評も担当。家族で一つことにこんなに熱中したのは久しぶりかな。開際になって、まあ、これなら大丈夫かな……とささやかな自信めいた気持を持った。やはり早くから準備するのは大事だな。

展示は「二十周年のつどい」時に展示した「戦中戦後の日記いろいろ展」をそのまま飾ることに。地元奈良と縁がある笠原徳日記の一部をガラスケースに飾ることにした。昭和十五年の奈良旅行の日記である。一週間は笠原徳日記の準備にかかりつきり。これはサーピス精神のなせる業。説明文字は会員の片岡良美さんに筆書きを依頼。忙しいのにがんばってもらった。展示内梱包や発送作業にも夫の協力あり。

### \*一月二十八日 受賞式前日

前日に出発。夫と息子二人と孫も同行。孫とは初めての旅だ。新

幹線中から富士山がきれい。一生忘れない富士山の勇姿なり。京都からひなびた感じの奈良へ。JR 郡山駅真ん前にあるホテルに入り、一息。郡山市役所の車が迎えに来る。会場の「DMG MORI やまと郡山城ホール」へ向かう。

町並は江戸時代のままだが、ホールは大きくきれいな入り口で「女性の日記から学ぶ会」からの花が華やかに迎えてくれてうれしい。

職員が五名もついでに展示を開始。予定通り二時間で飾り付け終了した。思ったようにでき満足。先ずはやれやれだ。ホテルに帰り食事。息子二人に孫二人。孫たちは久しぶりに会って大はしゃぎ。賑やかな前夜祭となった。早く寝て明日に備える。

#### \*一月二十九日 受賞式当日

午前九時半に会場へ。白井文化懇会の友人一同で二つの花束が届く。ありがとう。次々に関西の会員さんが到着する。この寒い時期に応援に来てくださりありがたい。喫茶室で自己紹介したり懐かし話すうちに、私の会場入りの時間。私は控え室へ。ひとりで昼食。講演の内容を確認する。隣の部屋で選考委員のお偉い先生方が昼食。小さい声が聞こえる。ひどく緊張する。紹介してくれるとよいのになあ。

さあ、ブザーが鳴って開会だ。会場は四百人くらいかな。意外と落ち着いている自分を発見。市長挨拶、受賞者紹介、お礼



の言葉、記念講演、水木十五堂作詞の大和鉄道唱歌発表、座談会と順調に進み、定刻にぴたりと閉会となった。

さあ、展示の片づけだ。主人と職員に助けてもらい実に手際よく片づけ終わる。急ぎ会場内にあるパーティー会場へ駆けつける。立

食の簡単なものだが市長さんや市のお偉方、選考委員さんと親しくお話できた。ああ、終わった。長い半年だったなあ。

夜は雨。主人と東京から応援に来てくれた水津幸一会員と三人でホテル前の飲み屋さんで一杯。責任を果たせた後の美味しいお酒であった。話題は賞金五十万円の使い道。さあ、どうする？何か記念になり、会の若い人たちが勇気づけるような使い道はないだろうか。頭がまた次の目標に向かって走り出した。

#### \*四月四日 信州大学同窓会連合会長賞頂く

早春の松本。晴れてアルプスがきれいな朝。信州大学入学式の会場（松本市民体育館）で二十人の入学生の前で「信州大学同窓会連合会賞」を頂いた。水木十五堂賞受賞がきっかけである。若い受賞者の中で高齢者は私だけ、「さすがの貫禄ですね」と若いアスリートたちに褒められた。余りの荣誉に興奮したのか、副賞のお金を亡くしてしまった。残念無念!!



\*六月十五日 すばらしき後日談

六月十日の「二十一周年のつどい」に。厚かましくも水木十五堂賞受賞コーナーを設けた。それを見た千葉市の会員・御船順子さんが駆け寄ってきて「鳥さん、水木コレクションの本持つていないの？」と尋ねる。「知らない」と答えると「あらら、鳥さんが持つていなければ駄目な本よ、すぐに送るね」と約束してくれた。翌日のこと、早くも一冊の本が送られてきた。「収集家100年の軌跡―水木コレクションのすべて」(平成十年、「国立歴史民俗博物館」とある。A4で厚さ1センチ。151頁。写真がどつき入り、学者先生方が解説文もたくさん載せた誠に見事な一冊である。この本の存在を知らないでいたとは、何とも恥ずかしい限りだが、今、ここで出会えたことは幸いである。畏友に感謝あるのみ。

水木十五堂から子孫三代にわたるコレクションは、奈良市教育委員会、天理大学、柳澤文庫など十数か所に分散し收藏されているが、その内、六千点が佐倉歴史民俗博物館にあるという。平成十年、同館では企画展示を行い、前述の図録を作成したとある。現・国立歴史民俗博物館の館長である久留島浩先生がその責任者として解説も書いておられる。丁度私

は「女性の日記から学会」を創立し、日記取材や会の運営に奔走していた時期であり、佐倉でのこの企画についてはまったく知らなかった。もう一つ加えると「水木十五



堂賞」の選考委員の一人が久留島浩先生。面識も全くない一人が水木十五堂賞を中にしてご縁が通ずる。受賞式当日は久留島先生はご欠席でお会いできなかった。残念であったが、いつか必ずお会いできるものと信じている。

きたがわ・ハウート

「力」本、衰えず

以前にも書いたことがあるが、書店の本棚を眺めていると、『○○の力』という書名が未だ多く、(力)本、未だ衰えずの感を深くする。

手帳にメモしているので、再び紹介しておきたい。姜尚中さんの『心の力』『悪の力』などは多くの読者を得ているだろう。そうあって欲しい良書だろうと思う。『死の力』(鷺田小彌太)、『あの世へ逝く力』(小林玖二男)、『魂の力』(越智啓子)とか、『インド人の力』(山下博司)等、一度は手に取ってみたい本もある。阿川佐和子『叱られる力』『聞く力』があり、池上彰『学び続ける力』など諸兄弟姉妹であろう。石原慎太郎に『エゴの力』がある。五木寛之『選ぶ力』がある。篠田桃紅さんの『百歳の力』も心強いではないか。女性側から『出逢う力』(浅見帆帆子)、『氣付く力』(木村藤子)など。男性側から、何とも男っぽい力を感じさせる本が出る。『闘う力』(なかにし礼)、ウーン凄いで！『チームの力』(西條剛央)、『強い力と弱い力』(大栗博司)『信頼する力』(遠藤保二)など。もともと『負ける力』(藤原和博)もあるが、多分、良書であるに違いない。しかし『遊ぶ力は生きる力』(斎藤孝)なんてどうだろう。斎藤センセに聴いてみたいね。小生、遊ぶ力、強い力、闘う力…と失い、何の(力)が残っているのだろうか。

(北)

# 島さんの快挙

岡野 誠

本会会員・理事で女性の日記から学ぶ会代表の島利栄子さんが水木十五堂賞を受賞した。この賞は中近世の古文書、絵地図、文化人の書状など膨大な資料を残した水木要太郎（雅号・十五堂）の功績にちなんで奈良県大和郡山市が創設したものである。今まで荒俣宏氏、歌舞伎俳優の市川猿之助さんなどが受賞している。

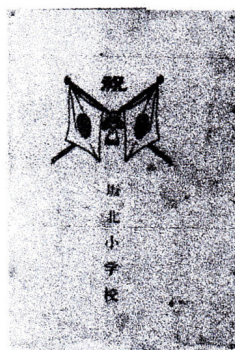
島さんは特に女性の日記を中心に蒐集を行ってきた。その時代に生きた人の想いを表現するとともに、庶民の暮らしを実証する貴重な資料として保存・活用してきた。人知れず消えていってしまう女性の日記を、次世代に正しく伝えることに貢献している活動が認められたものである。

島さんは子供のころから書くこと（記録）とモノを大切に（保管）ことが好きだったようである。これは現在でも続いており、まさに島さんの真骨頂である。小学生時代の図画や絵日記などをいまだ持つており、中でも子供のことに食べたみそパンの袋が残されているのにはびっくりした。

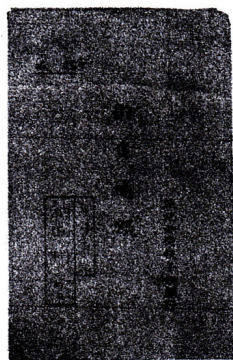
平成8年に会を設立して活動20年で会員数240名にもなり、勉強会や日記の読み解き作業、会報の発行や出版、さらには数多くの講演や展覧会などを行っている。今までに提供を受けた日記などは4,000点にもなりその保管場所に苦勞しているという。

島さんは知らなかったようであるが、選考委員には歴史民俗博物館の久留島浩館長が名を連ねており、水木十五堂の資料も佐倉に保管されているという。機会があれば館長の話伺い、資料も見てみたいものである。

この度の島さんの受賞は、まさに快挙であるとともに臼井文化懇話会の誇りである。島さんの夢は日記館をつくることだそうである。この夢の実現に少しでも後押ししたいものです。



みそパンの袋



小学校時代の貯金通帳